

圖說俳句大歲時記 秋



圖說俳句大歲時記

秋

角川書店版



図説 俳句大歳時記〈全五巻〉秋

昭和39年12月30日 初版発行

定価 4500 円

編 者 角 川 書 店

発 行 者 角 川 源 義

写真製版所 株式会社 高木写真製版所

本文印刷所 中光印刷株式会社

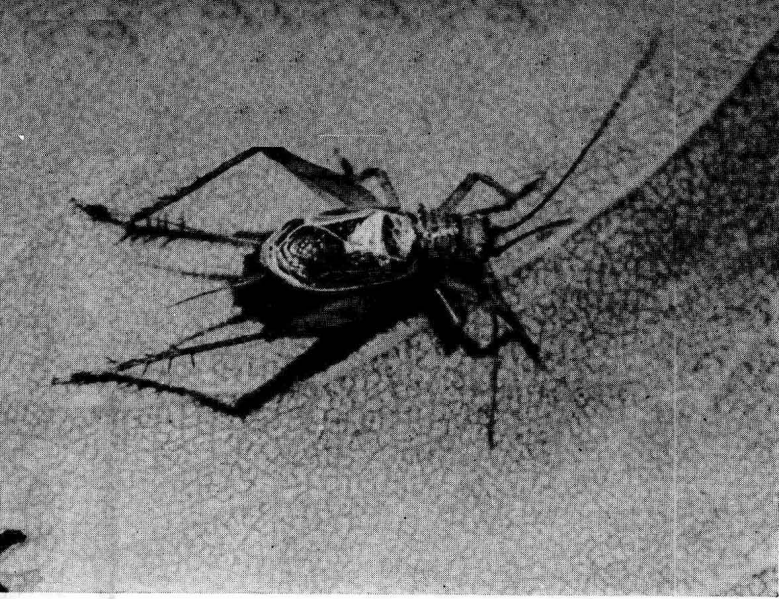
製 本 所 株式会社 鈴木製本所

発行所 株式会社 ^{かど}角 ^{かわ}川 ^{しよ}書 ^{てん}店

東京都千代田区富士見町2の7
電話九段(261) 0111(代表)
振替口座東京195208番

© 1964 Printed in Japan

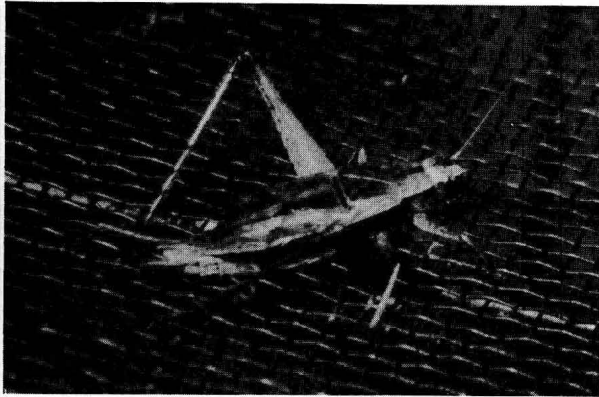
落丁・乱丁本はお取り替えます



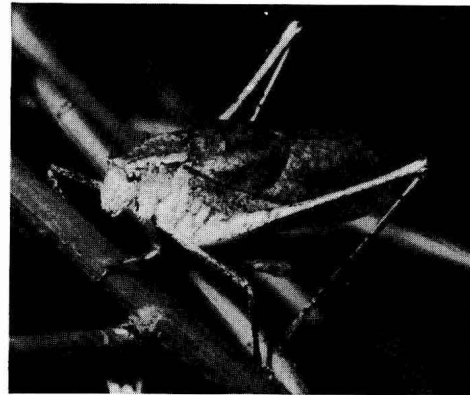
クサヒバリ



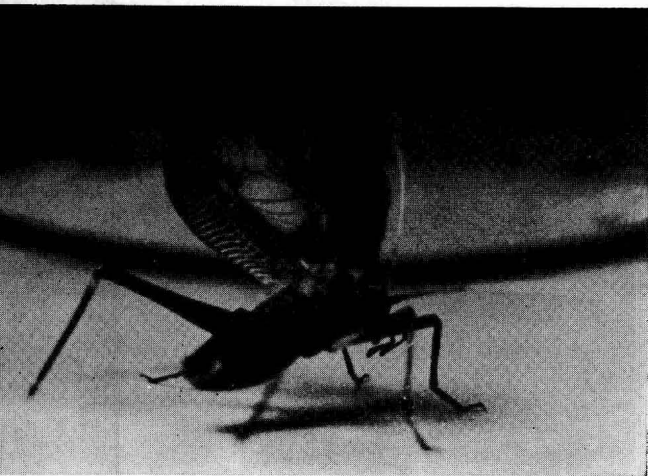
ウマオイ



マツムシ



クツワムシ



スズムシ

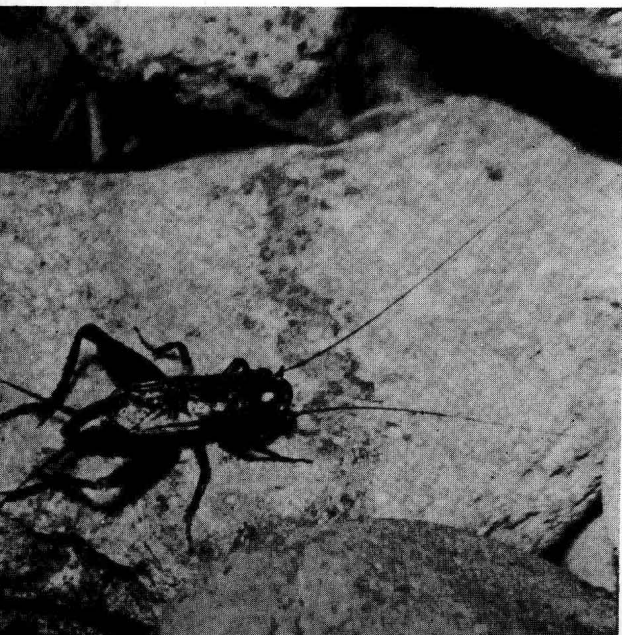
オカメコオロギ



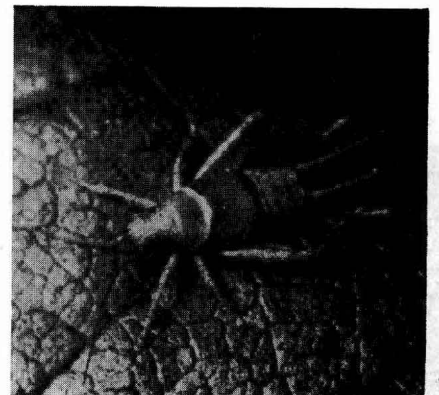
カンタン



ツツレサセ



エンマコオロギ



カネタタキ

秋の鳴く虫

自然の演奏

秋の野山に鳴く虫の声は、この季節になくはならぬ自然の楽の音として、私たちを楽しませてくれるが、春は小鳥のさえずり、秋は虫の声という対照は、いかにも自然の妙というべきであろう。日本は美しい声で鳴く多くの秋の虫に恵まれていて、その声を楽しむことは古くから生活の中に溶け込んでおり、また文学などにも取り入れられているが、これは他の国にはあまり類のないことと思う。

鳴く虫

秋の鳴く虫というと、だいたいキリギリスの仲間とコオロギの仲間に関する昆虫であって、セミの類はいらない。この二つの仲間は非常によく似ている近縁の種類であるが、形態的にも相違があり、はっきり区別がつく。日本には現在のおおの四十五、六種ぐらゐの種類が知られており、全国に分布しているが、なかには最も普通に聞かれるものもあり、また珍しいもので、特殊な場所へ行かないと見られないものもある。だいたい寒い北の地方へ行くと種類は少なくなる。秋の鳴く虫といっても、コオロギやキリギリスの仲間には鳴かない種類が、それぞれ七、八種はいるが、これは発音器をもっていないので、鳴けないのである。

虫の発音器官

秋の鳴く虫が、どんな仕掛けで音を出すかというと、キリギリスもコオロギも、翅に発音器を備えていて、それで鳴くのである。セミが腹部の発音器の中にある鼓膜を振動させて音を出し、人間でいへば声楽家に当たるのに反し、秋の鳴く虫は、発音器官である二枚の前翅をこすり合わせて音を出すので、バイオリンかマンドリンのような弦楽器を奏する器楽家にたとえたらよいであろう。

この前翅を調べてみると、第二肘脈という一本の翅脈の裏面に、

微細な歯が一行に並んでいるが、この鐘状器をもう一枚の翅にある摩擦片という部分にこすり合わせて音を出すのである。その音が、薄い翅の膜に伝わり、さらに翅と身体の間のできる共鳴箱に共鳴して、その種類独特の音色を生ずるのであるが、その歯の数や、形や、それをこすり合わせる速さなども関係がある。そして、鳴き声のリズムは翅の動かし方によっているので、このようなからくりで、その種類に特有な鳴き声が生まれてくるのである。

虫の鳴く時期

秋の虫が鳴き出すのはだいたい立秋のころからであるが、ことにエンマコオロギは毎年きまって立秋の前後から鳴き出すので、その声は秋を告げる声といつてもよいと思う。実際、その声は秋を思わすによい声でもある。ツツレサセコオロギ・オカメコオロギなどないたい同じころから鳴き出すが、ウマオイ・カンタンなどはそれよりも少し早く鳴き、スズムシ・マツムシ・クサヒバリなどは少し遅れて鳴きはじめる。

これらの虫は秋の間鳴きつづけるが、その鳴き終わる時期も、種類によって、また地方によって異なっている。マツムシ・スズムシなどは十月の半ばごろにはもうほとんど聞かれなないが、エンマコオロギやツツレサセは十一月にはいっても聞かれる。南の暖かい地方では、もっとおそくなくてもまだ鳴いている。

虫の鳴く時刻

次に鳴く時刻であるが、秋といつても暑い八月ごろは、夕方うす暗くなり少し涼しくなつてから鳴き出すが、秋もふけてくると、明るい昼間から鳴いている。温度と照度が関係しているに相違ない。例外的なものとして、クサヒバリは暑い最中でも、朝早くからその涼しげな声をわれわれの耳に響かせてくれる。

鳴き声と気温

コオロギは気温の高い間は活発ににぎやかに鳴いているが、季節の推移につれてだんだん衰えてゆき、秋も深くなると、低い声で細細と鳴き、哀れを催す。自然の凋落に唱和するようである。これはコオロギ自身が秋の哀れを感じて、そのような鳴き方をするのでは

ない。もっと機械的な理由によっているのである。

コオロギの鳴き声は、温度が高くなると、音も高く、リズムも早くなり、元気に聞かれる。それに反して、温度が下がると、音も低く、ゆっくり鳴いて、聞くほうにも哀れに感ぜられる。これは、生理的な原理によっているのであって、翅を振動させる胸の筋肉は、昆虫が変温動物であるために、気温の高低によって、その温度も変わり、活動力の強弱も変わってくるのである。これが気温の高低によって、鳴き声が変わってくる現象の原因であるので、虫に心があるわけではない。このように物理的ともいえる変化が、季節の推移に伴う情緒によく合致しているところがおもしろいのである。

虫の鳴く動機

秋の虫はなぜ鳴くかという疑問が起こる。鳴くのはだいたい雄ばかりであって、一般には雄が雌を呼ぶために鳴くと解釈されている。もちろん雄の声によって雌が近寄ってくることはありうるが、実際は、そればかりではないようである。たとえば、エンマコオロギなどは三種の声をもっている。一匹だけで鳴くときは、コロコロ、コロコロという声で、秋らしい朗らかな声である。雌がそばへ来たときはまったく別の声となつて、愛撫するようなささやきとなる。また雄同士で喧嘩をするときは、キリキリ鋭い声となる。このように、鳴き声にもいろいろ意味があるのである。声を出すのは虫の本性という以外にはないであろう。

自然に親しむ

秋の鳴く虫の声は種類によって異なっていて、鳴き声を聞けば、その種類がわかる。また、その鳴く音の調子とかリズムが違えばかりでなく、その声のもたらす情趣もそれぞれ違っている。秋の鳴く虫の声を聞いて、その種類を知り、その情緒を味わうことは、私たちを自然にいつそう近づけることになるのではないかと思う。本書には、最も普通に聞かれる著名な秋の鳴く虫十二種の声をカラー・シートに入れておいた。

大町 文衛

(虫の声採録 松浦一郎)





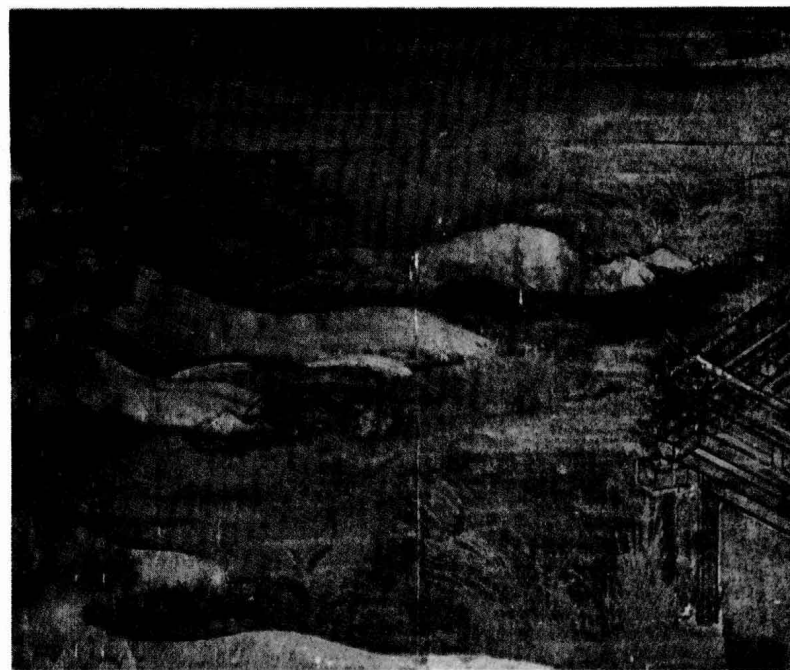
露けきひとり（北野天神縁起）



秋思の扇（源氏物語絵巻）

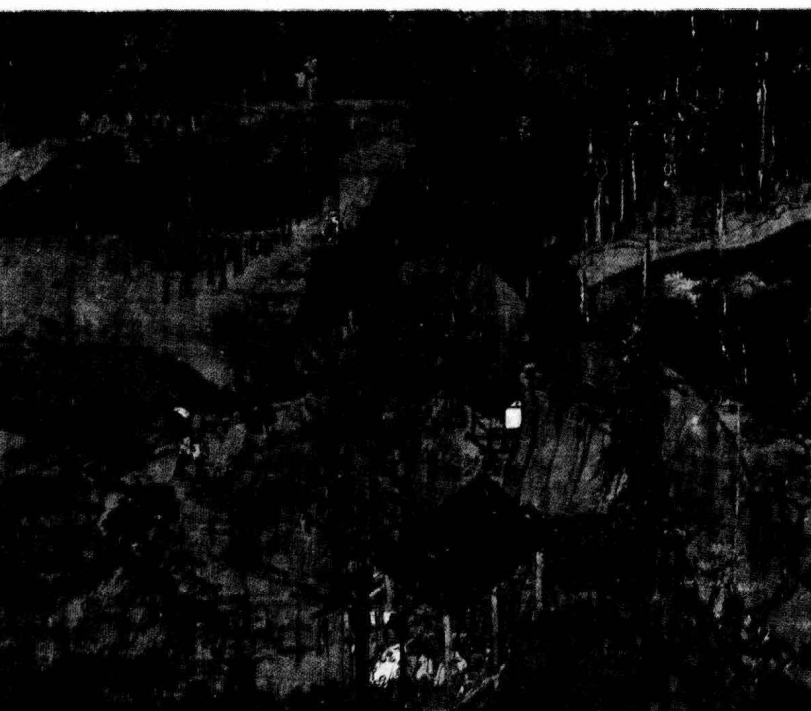


白壁の秋（一遍上人絵伝）



月の秋草（紫式部日記絵巻）

秋山三彩（一遍上人絵伝）



もみじの双樹（伴大納言絵詞）

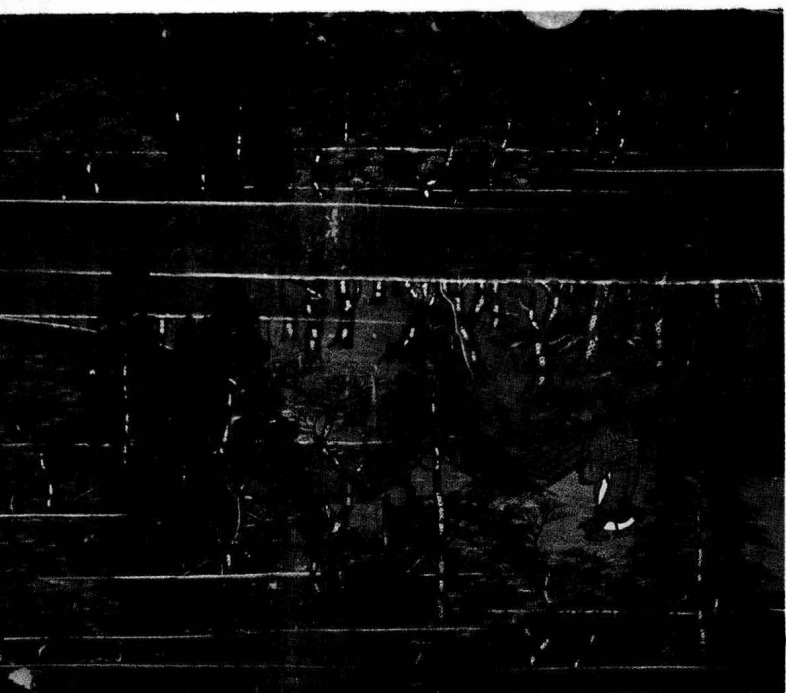




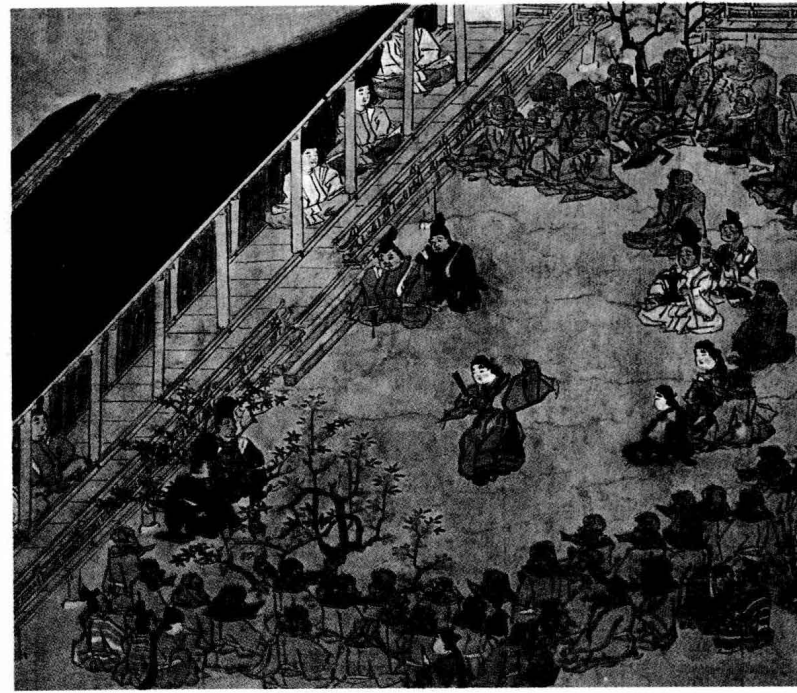
柿のまがき（春日権現験記）



せきれいの声（法然上人絵伝）

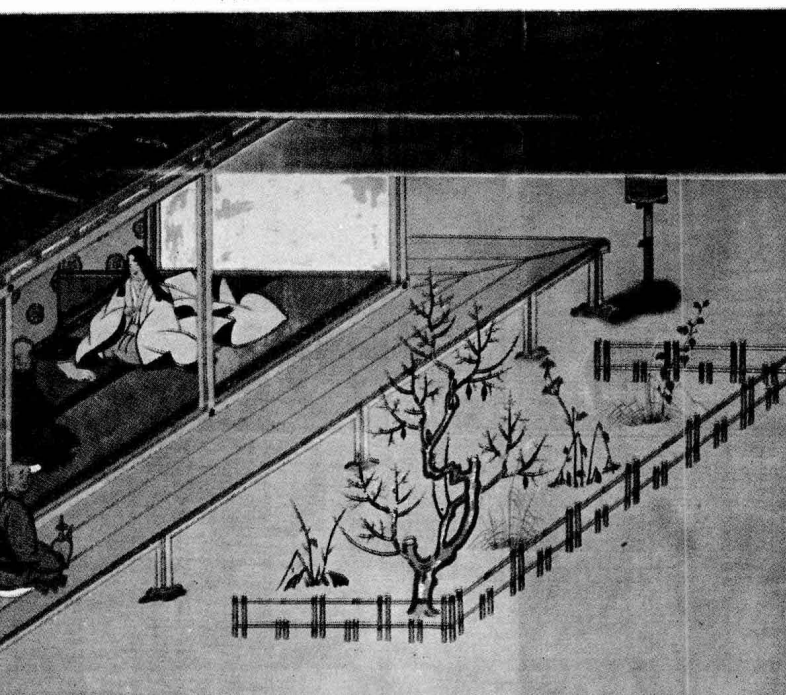


秋行く流れ（春日権現験記）



紅葉の舞（法然上人絵伝）

みの虫の梢（春日権現験記）



落葉の訪れ（法然上人絵伝）

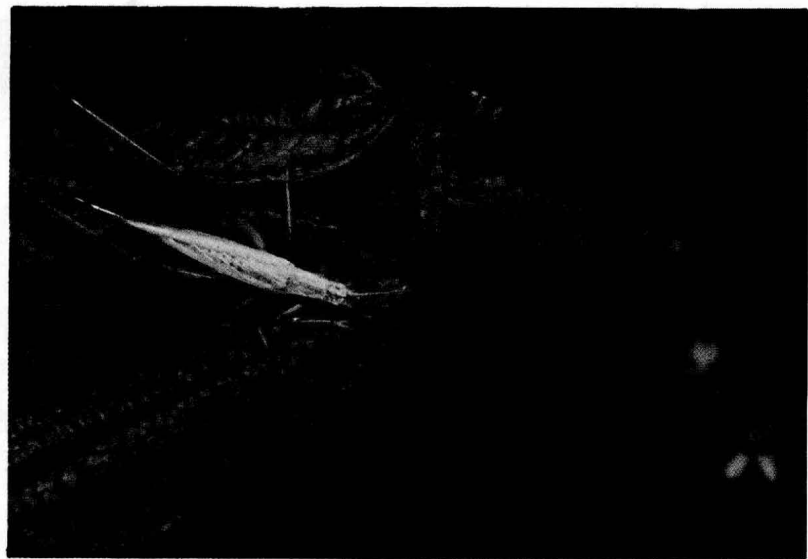




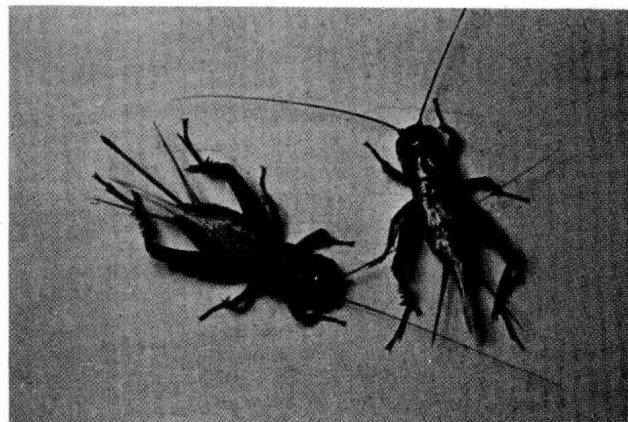
スズムシ



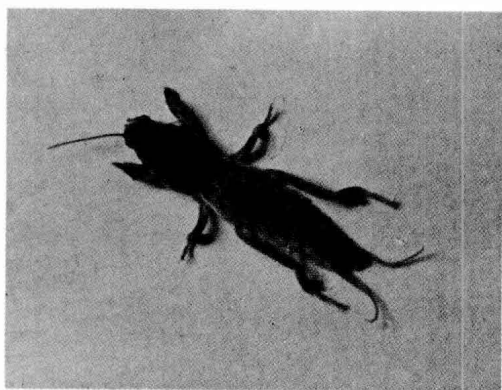
クツワムシ



カンタン

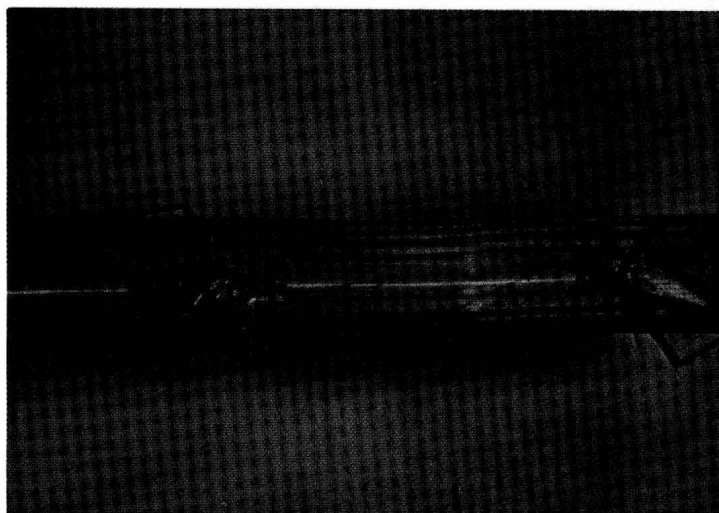


エンマコオロギ



ケラ

クサヒバリ



マツムシ



ウマオイムシ



その花の道（長野市郊外飯縄高原）







入日の稲架(長野県三才市郊外)





秋雲夕雲(長野県飯縄高原)



コスモス 部落 (長野県戸隠)

